

## ■エッセイ

## 伊藤清蔵の生涯 盛岡高等農林教授からアルゼンチンの大牧場主へ

海妻 矩彦 (かいづまのりひこ・館長)

伊藤清蔵は盛岡高等農林学校の教授の中でも特異な実績を残した一人である。今でも農業経済学や農業経営学の分野では良く知られた人である。今年度の県博日曜講座で私は彼の事績を簡単に紹介したが、ここでもう一度その概要を記しておきたい。

彼は明治8年(1875)に今の山形県河北町に生まれた。明治25年(1892)に札幌農学校予科に入学し、明治33年(1900)に本科を首席で卒業するや恩師の佐藤昌介教授(のち初代の北海道大学長)のもとで助教教授をつとめた。そのとき、佐藤教授から明治35年(1902)に創立された盛岡高等農林学校の教授に推薦すると言われ、その準備のために彼は明治36年から4年間文部省派遣の海外留学生となった。新渡戸稲造教授の勧めでドイツのボン大学を選んで農業経済学を学んだ。その間に後の農学博士の論文となった「支那、日本及び南欧諸国生糸生産上の国家間競争(独文)」を書き上げている。

帰国後は直ちに盛岡高等農林学校の教授に着任したが、考えるところがあって明治42年(1909)にはドイツ留学のときに知ったドイツ人女性のオルガ・ディッシュの熱烈なプロポーズにより結婚し、彼女の奨めに従ってアルゼンチン国に渡る事となった。二人は首都ブエノスアイレスから南西500キロのポリバル市(パンパ平原のど真ん中)の近郊で一つの牧場を借り受け、そこで収穫した飼料作物を使って他の牧場の牛を肥育させる事業を手始めに畜産業を開始した。

彼は後にアルゼンチンでも有名な大牧場主となり、最盛期(1925年)には8000ヘクタールに及ぶ牧場を経営する身となった。彼は自分の牧場をフジ牧場と名付けているが、これはわが国の最大の牧場である小岩井農場の約4倍に当たる広大なものである。

彼の経営理念は、彼が盛岡高等農林学校教授であったときの最初の著作であり、わが国における最初のその分野の専門書でもある「農業経営学」の中に述べられているが、すべからく牧場主たる者は自ら汗を流して働き、如何にしたら自分の牧場の全体から利益が上がるかを常に計量しながら経営すべきであるというものであった。いわゆる不在地主として自らは労働しないような経営方式を取ることを嫌ったのである。彼はいわゆる大農経営を日本国でも実現させようと考えて行動した形跡があるが、その夢は到底無理と判断して海外にそれを託したのであろう。

彼の自伝である「南米に農牧三十年」(彼の没後の昭和31年・1956年に出版)には彼の苦難の経営について様々な記述があるが、その特長は、事を起こすに先立ち常に紙上であらかじめ結果についての数量計算を行うという堅実性と、時代の動きに注目して時に今が好機と見るや大胆な選択をも試みるという冒険性の両面性にあったといえる。この点では彼の妻となったオルガさんの内助の功があり、そのエピソードも記述されている。二人は息のあった良いコンビであった。彼の考えによれば、いわゆる大胆な選択を成功に導く上で必須なものは何よりも経営者自らが額に汗する実践家であるということである。そうであってこそ始めて成功が勝ち取れるという考え方を持っていたようである。

現在では、それぞれ独自の経営哲学を持った経営者が日本にも数多く見られるが、当時の日本人としては彼のような農業経営者はきわめて稀であったといえよう。

彼は日本が第二次世界大戦に巻き込まれる寸前の昭和16年(1941)11月に突然の狭心症でこの世を去った。アルゼンチンに渡航して以後は一度も日本に帰ることはなかった。彼には子どもがなかったの

で、彼の牧場は今に残ってはいないが、フジ牧場の邸宅は彼の功績をたたえる記念として今も昔のままの姿で残っている。



伊藤清蔵博士



妻 オルガ・ディッシュ・伊藤